

氏 名	まつ え けい し 松 枝 啓 至
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 391 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 人 間 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	デカルトの「方法」をめぐって ——デカルトの「観念」理論と「分析」理論——

論文調査委員	(主 査) 教 授 富 田 恭 彦	准教授 佐 藤 義 之	准教授 安 部 浩
	准教授 戸 田 剛 文		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、デカルトの形而上学における「方法」に焦点を当て、彼の哲学の基本的論理構造を解明しようとするものである。デカルトの方法は、観念理論と分析理論の二本柱からなる。そこで、第Ⅰ部では、それら二つの理論の内実を明らかにし、第Ⅱ部では、その結果を踏まえて、それらの理論に内在する重要問題を批判的に検討することにより、デカルトの学問体系が彼が望んだような十全性を有していたかどうかを考察する。

第Ⅰ部第1章 観念の新たな用法① ——自然学の文脈において

『精神指導の規則』では、「観念」は理念や概念、プラトンのイデアに近い意味で用いられていると同時に、感官に刻印された像という物的事物を表すものとしても用いられている。これに対して、『世界論』では、思惟の中の感覚が、対象—観念—思惟（あるいは精神）という三つ組みの一項として「観念」と呼ばれる。また、『人間論』では、感覚の発生の機会となる松果腺上の形象が「観念」と呼ばれる。「観念」のこうした多義的用法は、『方法序説』の内にも認められ、そこには、概念的なものを「観念」と呼ぶ用法も確認される。また、『屈折光学』では、専ら精神の中の感覚を表すものとして「観念」が使用されている。

第Ⅰ部第2章 観念の新たな用法② ——形而上学の文脈において

これに対して、『省察』では、「観念」は一貫して思惟の様態を表すものとして使用されている。観念には、質料的な面と表現的な面があり、観念の「表現的实在性」が、デカルトの議論において重要な役割を果たしている。彼は観念の表現的实在性を否定するカテルスの批判に答えて、観念の表現的性格およびその外的原因との関わりに論及するとともに、観念を物的なものとするホップズやガッサンディの批判に答えて、その非物質性を強調する。

第Ⅰ部第3章 デカルトの「分析」

『省察』に認められる方法を、デカルトは「分析」と呼ぶ。「総合」が「ア・ポステリオリ」な方向でなされる証明であるのに対して、「分析」は「ア・プリオリ」な方向でなされる。デカルトは、形而上学における第一の概念を明晰かつ判明に捉えることの困難さから、分析をより効果的な方法として採用する。『省察』が「私の把握に関する順序」に従って書かれていることからすれば、「分析」を特徴づけるのは、認識論的に「より前なるものから」という順序に従うことであり、そこでなによりも重要な役割を果たすのは、「確実かつ不可疑」という認識論的基準である。

第Ⅰ部第4章 「明晰かつ判明」と「確実かつ不可疑」

「確実かつ不可疑」は「明晰かつ判明」と置換可能なものとしてしばしば扱われてきた。しかし、「明晰かつ判明」は、「確実かつ不可疑」の必要条件ではあるものの、十分条件とは認められない。なぜなら、数学的知識は明晰かつ判明でありながら、欺く神の想定の下では不可疑のものとはされず、唯一「私はある」のみが、その想定下においても「確実かつ不可疑」とされているからである。

第Ⅱ部第1章 「デカルトの循環」

「私はある」の特権性は、「確実かつ不可疑」を基準とする方法的懐疑によって際立つ。だが、デカルトの論は、「明証性の一般的規則」に従って神の存在証明を行い、そのことによって当の規則が確立されたとするように見えるため、「デカルトの循環」が指摘されてきた。この問題について、DoneyやFrankfurtが興味深い解釈を示したが、彼らはいずれも、現前の明証知は神の保証を要しないとしている。しかし、問題はむしろそこにある。Rodis-Lewisは「注意」という働きに注目することによってデカルトの循環は回避されているとする。しかし、彼女の解釈では、「確実かつ不可疑」であるはずの「私はある」と、他の明証的知識との間の差異はないことになる。「明晰かつ判明」と「確実かつ不可疑」の差異を認める限り、循環の問題は残らざるをえないように思われる。

第Ⅱ部第2章 デカルトの自然主義的性格 —— 第三省察における「観念」

デカルトの論述は、第三省察以降、「観念」という概念に大きく依拠しているが、それは精神内の存在として措定され、外的事物との関係をまったく絶たれている。その点で、外的事物との関係において位置づけられる「観念」の自然学的用法とは大きく異なる。にもかかわらず、デカルトは、第三省察においてすら、外来観念の外的事物との非類似性を論じたり、神の観念の表現的實在性に「因果性の原理」を適用してその原因としての神の存在を証明したりしようとするなど、「私の外」との関係を観念に対して持ち込もうとする。こうした彼の議論には、対象—観念—精神という三つ組み構造が暗黙の裡に機能していると見られる。

第Ⅱ部第3章 方法的懐疑の論理空間 —— セラーズの「経験主義と心の哲学」を手掛かりに

セラーズは、与件ですら「理由や正当化の論理空間」の中でなければ機能しないとした。デカルトの「私はある」は、感覚与件ではないものの、それ自身が成立するための「理由や正当化の論理空間」があったはずであり、懐疑のプロセスにおいて、様々な事柄が、その論理空間を構成するものとして使用されていた。一切を捨て去るということは、例えば錯覚に関する議論の論拠をも捨て去ることであり、そうなれば、錯覚という現象そのものを証示することすらできなくなる。とすれば、演繹によらないとされている「私はある」ですら、非推論的・直接的な知識ではありえないことになる。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴は、デカルトのテキストを広範に踏まえることはもとより、近世哲学に隠然たる影響力を行使していた古代の議論にまで踏み込むとともに、現代の最先端の議論にも立ち入って、論証をより周到なものにしようと努める論者の基本的態度にある。学界に対する論者の寄与として特に評価されるべき点は、次の五つである。

1. 論者はデカルトの「観念」の用法を丹念にたどることによって、その変容・差異を明らかにすることに成功している。「観念」は、自然学的文脈においては、感覚を表すものとしてしばしば使用され、物体—観念—精神という三つ組み構造の中に位置づけられる。これに対して、『省察』においては、観念が、その原因となる物的ななにかとの対比において、明示的に導入されることはない。それにもかかわらず、デカルトは、こうした対比に言及してしまう。これが、第Ⅱ部第2章における自然主義に関する論者の議論の鍵となる。論者はその議論を念頭に置きつつ第Ⅰ部前半部分で周到にその準備作業を行っており、この点で、近年軽視されつつあるテキストの綿密な調査の典型的作業を進めたと言える。観念の「質料的」な面と「表現的」な面についての論者の調査についても、同じ評価を与えることができる。
2. 「分析」や「明晰かつ判明」、「確実かつ不可疑」に関する論者の調査についても、同断である。「分析」に関しては、論者はデカルトの「分析」概念を考察することはもとより、それをスコラの見解と対比させることにより、デカルトの分析概念の特徴を明確にしようと試みている。また、論者はここで古代の懐疑論にも言及し、デカルトにまで波及している懐疑論的議論のルーツを探るとともに、デカルトの分析概念をそれとの対比によって際立たせようとする。このように、論者の議論には研究者としてのレベルの高さを感じさせる論及が多々認められ、近年に稀な、信頼性の高さを垣間見せている。また、「明晰かつ判明」と「確実かつ不可疑」の差異に関する議論も、関連する様々な言葉の丹念な調査を基盤とするとともに、第Ⅱ部で論じられる「デカルトの循環」を念頭に置いて、それを再考するのに十分な準備がなされている。

3. 本論文の第三の寄与は、「デカルトの循環」の再検討にある。論者は第二反論と答弁、第四反論と答弁を検討し、さらにDoney, Frankfurt, Rodis-Lewisの解釈を取り上げて考察を重ね、その結果、「明晰かつ判明」と「確実かつ不可疑」の差異を認める限り、デカルトの循環の問題は残らざるをえないという結論を出す。「デカルトの循環」という、扱う者の認識の深さを要求する難問に対して、論者は限りなく周到に論を進めるよう努め、その成果は十分に評価されるべきものと判断される。
4. 本論文の第四の寄与は、デカルトの「自然主義的」性格をできうる限り明らかにしようとした点にある。デカルトの自然主義的な面については、それを肯定するにせよ否定するにせよ、これまでも指摘されてきたところではある。論者は、これを明らかにするにあたって、第I部における「観念」についてのテキスト研究の成果を利用しつつ、さらに論拠を引くことによって、その議論をより実証的なものにしようと努める。デカルト自身の論述の中にこうした自然主義的論理を確認するという地道な作業は、十全に評価されるべきものである。
5. 本論文の第五の寄与は、デカルトの方法的懐疑をめぐる議論にある。論者によれば、方法的懐疑は、その豊かさの反面、「デカルトの循環」のような論理的矛盾を引き起こす要素も含まれている。論者は、この問題を考察するにあたって、「理由や正当化の論理空間」というセラーズの見解を援用し、デカルトが「精神の単純な直観によって認識する」と言う「私はある」も、それ自身を成り立たしめる正当化の論理空間の内にあることを、われわれは認めざるをえないと主張する。論者のこのような主張は、まだ豊富な肉付けがなされているとは言えないにしても、デカルトの方法的懐疑と第一の真理の再考のために必要な視点を、明確に打ち出したものとして評価するに値する。

上記五つの論者の主張の各々については、よりいっそう支えを堅固にすべきと考えられる部分もある。しかし、語学力を駆使して、古代の哲学者から、デカルトの同時代人の著述にまで目を向け、他方、その鋭利な論理的思考を駆使して現代哲学の議論をも念頭に置きながらデカルトの論理を抉り出そうとする試みは、国内外の研究状況からしても、極めて高い水準にあると判断される。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。